

デイルタイの認識論

社会学研究科

安 田 良 雄

序 言——デイルタイ研究の意義

デイルタイの特徴を、生の立場、即ち理性よりもむしろ衝動、意志、感情を重視する人間観に立つての従来の観念論的思考に対する批判と学問性（シヨウベンハウエル、ベルグソンの如く形而上学的色彩をもたず、精神科学の認識論を試みたという意味で）の二つの点に見出し、このデイルタイの考え方を追体験することによつて、我々自身の学問（哲学、思想史研究）に対する態度を反省する。即ち、哲学や歴史的研究が個人的、社会的な生活に対してどの様な意味を持ちうるか、持ち得るにはどの様な自覚、反省が出发点として必要であるか、またそれを学問として成立せしめるにはどの様な手続が要求されるか、等々を考えるために、デイルタイの思考を媒介として取り上げた。従つてその出发点として、本稿は彼の思想の形成、発展を出来るだけ忠実に跡づけたものである。

第一章 青年時代の研究対象

ギムナジウム時代にはカントの論理学、ロマン主義文学に接した。
大学時代には、キリスト教思想史、教会史及びギリシヤ哲学等を研究。卒業後、それらと並んでシュライエルマツハー研究に従事した。

第二章 問題意識の形成（神学から哲学へ）

彼が神学科に属しながらも、漸時、その性格、時代風潮（自然科学、実証主義の時代）の故にそれから離れて、哲学（歴史的研究と哲学的即ち認識論的研究とを結びつける試み）に向う。

第三章 新理性批判——当時の哲学界——

19世紀前半の哲学界のうごきを、ヘーゲルの観念論体系の崩壊、実証主義、ロマンチズムの隆盛として把握し、このなかから「カントに返れ」の運動が生じたが、デイルタイ自身もその方向にあつた。この様な観点から、彼のヘーゲ

ル評価と、当時の彼の「新理性批判」の構想を紹介する。

才四章 新理性批判の形成

デイルタイのこの試みに影響を与へたものとして、(1) カント（その認識論的傾向を精神科学に適用せんとしたが、純粹理性でなく全人間を取り上げようとした。）(2) ロマンチズム（意志の強調、生の立場、直観の重視、実相心理学）(3) シュライエルマツハー（その解釈学の流れをうけながらも、その觀念論的構成、下部意識の無視を批判）(4) 歴史学者、神学者（生々しさ、歴史意識をうけつぎ、歴史学の基礎づけを課題として意識する）(5) トレンデレンブルグ（世界観と認識論との結びつけの問題、目的論的思考をうけつぎ）を挙げ、要するに右の人々から彼の全人間的、心理学的、解釈学的傾向をもつ批判哲学が出発することを明らかにする。

才五章 道德意識の分析と学問史

彼が30才の頃発表した二つの論文の紹介。これは要するに、カント及び経験論者は夫々前者は理性を、後者は感覚を、お互に切り離して取扱つて来たことを批判し、両者を生のなかに統一されたものとしてみるべきことを主張したものである。

今一つの学問史では、歴史的反省によつて精神科学史全般の聯繫が課題として意識されるに至つた経過が述べられる。

才六章 「精神科学序説」

彼の主著の一つ、50才の時発表された「精神科学序説」の紹介。こゝで彼の精神科学的認識論の投錨地点が、カント、ロツク、ヒュームの理性、或いは感覚のみでなく、感じたり意欲したり思惟したりする全人間、（内的経験）であることが表明され、これを以つて自然科学に対して精神科学が独自の方法——理解——をもち、これによつて前者と区分されるとする。しかしその方法の検討は晩年になつて行われる。

才七章 二つの認識的論文

「外界の实在についての信念の起源……」と題した論文では、さきの内的経験——こゝでは二つの意志状態即ち衝動と抑制の意識——によつて我々の实在に関しての信念が形成される、といった理論が展開される。

「経験と思惟」なる論文では、思考の形式と素材とを分つ考え方を斥けて、

生のなかに統一的な「聯関」を見出そうとする。

これらの論文で、彼の思想史的研究との関係、心理学者、英、仏の哲学の影響との関係に触れる。

オ八章 「記述的、分析的心理学考」

従来の心理学を自然科学的仮説を以つて説明せんとするものであるとして斥け、心理学は心の聯関、構造をそのまま記述的に捉えるべきであると主張する。

これに対して、この様な主張は心理学たり得ず、また仮説にすぎないという心理学者からの批判、また心理学は精神科学の基礎たり得ないとの新カント学派からの批判を紹介。

この様な批判などがきっかけとなつて、デイルタイは心理学を一応放棄して、むしろ彼本来の傾向たる解釈学に基礎づけの解決を求めるに至る。

オ九章 表現、体験、理解

精神科学は如何にして可能であるか、またその客観性如何、という問題は、我々は生の表現（客観的精神）を我々自身の体験を通じて理解する、という過程の分析である。この過程即ち「生による生の把握」の考察を「知識の理論」と称する。こゝでは、体験と生とが殆ど同義であること、いずれも「作用聯関」として把握されていること、体験を構造的にみると、知情意に分たれること、この分け方と彼の世界観学に於ける三つの類型との関係といつたものが初めに示される。次にこの個人的な体験を高めると「理解」の方法が生ずるが、この理解は対象と研究者との間の親近性に依存し、こゝに客観性の限界、また理解の非合理性の問題が生ずる。

この理解の手段となるものがカテゴリーである。これは自然科学的な（形式的な）カテゴリーと異なつて、体験より生ずる実質的なカテゴリーである。例えば作用聯関、目的、意味、発展等々である。

これらのカテゴリーのなかで重要なのは、意味のカテゴリーである。我々はこのカテゴリーによつて様々な現象の位置づけを行うがこゝには我々自身の立場、見方の相対性が含まれる。こゝに立場の多様性、相対主義、自由の問題等が生ずる。

結び

結びといつても甚だ漠然たる問題の提起にすぎない。即ちデイルタイの特徴を今一度、我々自身の立場に関らしめながら把えて、そこから生ずる問題をみ

てみるにすぎない。

彼の批判的立場が研究、読書から生じたものであるのに対して、我々の批判的立場が生活感情からする学問——社会科学、哲学——の意義についての反省であつたこと。

従つて学問の方法も、デイルタイが思想史研究のための認識論——理解を中心にしたもの——を考えたのに対して、政策部分をもつ科学とそうでない所謂教養学科との関係、価値判断と存在判断との問題、これらのものと実践的意欲との関係等々を織りこんだ認識論が要求されること。

また哲学を認識論に限ることなく、例えば倫理学等の樹立が要求されること、その際、その体系の出発点たる体験、その相対性等の自覚とその意味の検討を、デイルタイの考え方を媒介としながらなすべきこと、等が我々に残された課題であると言えよう。